文学における双子・多胎児
ー最近のバイオものについてー

志 村　　恵

Zwillinge und Mehrlinge in der Literatur : einige Beispiele aus den neuesten Publikationen, die die Bioethik thematisieren.

Megumi SHIMURA

21世紀に入り，色々なパラダイムを提示して20世紀を総括する議論が盛んであるが，20世紀の入り口であった1900年に二つの大きな出来事があり，これらがそれに続く時代を規定したことには疑いはないだろう。すなわち，プランクによる「量子」概念の発見とフロイトの『夢の解釈』(Die Traumdeutung) の出版である。したがって，20世紀は「量子物理学」の時代とともに，「サイコ」の時代と言うことができよう。これに対して，21世紀は「ゲノム」の時代なのだろうか？人々はヒト・ゲノム計画について半分不安と期待を持って語り，書店に足を運ぶと，ヤング・アダルトコーナーには『ゲノム・ハザード』や『ゲノムの反乱』といった題名のSFが並んでいる。

さて，本論では「ゲノム」と切っても切れない関係にある「多胎児」を扱ったバイオもので，最近目にした作品を紹介しつつ，そこに含まれる問題を共有したいと思う。

最初に紹介する作品群は，主に，「医学ミステリー」と言われる分野に属するものである。従来この分野には，一卵性双生児の場合，DNA鑑定しても個体を区別できないので犯人が特定化できないといったものや（たとえば，ブロックマンの『コフィ博士と双子の片割れ』[1]），結合双生児の片一方が重大犯罪を犯した場合，その事件とは直接は関係ないもう一人も一緒に処罰できるのかと言った特殊なケース（たとえば，マーク・トゥエインの『まぬけのウィルソンとかの異形の双生児』[2] やクイーンの『シャム双生児の謎』[3]），あるいはそっくりな双子の場合，目撃証言に証拠能力があるのかと言ったミステリーの定番と表してもよいようなテーマ群があった。

しかし，ゲノムの時代，これに「遺伝」，「体外授精」，「クローン」などのモチーフが加わってきている。

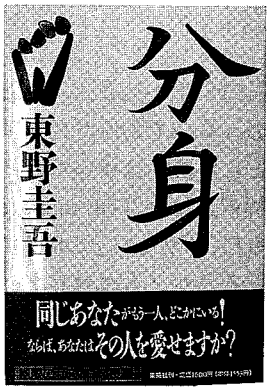
イギリスの羊「ドーリー」や石川県畜産総合センターの牛「のと号」「かが号」に見られるように，クローニングの技術が発達し，ヒトのクローンの現実味が増してきた現在とは違い[4]，一昔前は，クローンは遠い未来の世界を描くSFかグロテスク・フィクションのテーマだった。有名なものに，ハックスリーの『すばらしい新世界』[5] やメンゲレによるヒトラーのクローン計画なるものを扱ったアイラ・レヴィンの『ブラジルから来た少年』[6] がある。前者では，人間はもはや自らの肉体による生殖によって子孫を残すのではなく，全て人工授精によって，しかも優秀な遺伝子を持った一卵性の96子を作るようになっている。このようなグロテスクな世界

筆者：文学部助教授　受理：2001年6月8日

を，ハックスリーは逆ユートピアとして描いている。後者では，世界征服の野望を再開するために，ヒトラーのクローンを秘密裏に世界中の一般市民の家庭に人工授精で送り込み，環境要因をも同じようにするため，父親を早く亡くしたヒトラーと同じにしようとその家庭の父親すら殺害する狂気ナチ集団を描いている。この作品の影響で，クローニングが話題になるとき，ヒトラーのクローンが生まれたらどうするのかとの論評が常に出てくるのである。

さて，クローニングと体外受精を結び会わせて，母胎が違うのに一卵性が生まれるという前提で進められる医療ミステリーに，東野圭吾の『分身』(7) とケン・フォレットの『第三双生児』(8) がある。飛ぶ鳥を落とす程の人気作家が同じようなテーマのミステリーを手がけているのは誠に興味深い。

東野圭吾の『分身』では，母親を火事で亡くした氏家鞠子と自分がバンドのボーカルとしてテレヴィ出演したせいで母親を殺された小林双葉が登場する。この二人は瓜二つであるが，母親は別人である。また，出産時期も一年ほどずれている。実は，当時高城晶子と言う女性が不妊治療を受けたのだが，不妊治療の名目で本人に知らせることなく彼女自身のクローン胚を体内に入れられる。幸か不幸か彼女は流産し，この実験は失敗に終わる。しかし，研究者たちは予備に受精させていた他の二つの胚をさらに実験に使う。



図版１　東野圭吾：『分身』

すなわち，この研究のスタッフだった双葉の母が実験に志願し，妊娠したのだ。しかし，母性に目覚めた双葉の母は，実験前に約束していた受胎後の中絶を受けずに姿を消し，双葉を生む。一方，長い間子どもに恵まれなかった鞠子の母が不妊治療を受けることになったが，同研究チームの一員である夫の氏家は昔愛していた晶子を手に入れたいという願望に捕らわれ，晶子のクローンを自分の妻に着床・妊娠させる。この事実を後に知って，鞠子の母は鞠子と無理心中をしようとするが，ぎりぎりのところで思い直し，娘を助け，自分だけが焼死する。ところで，ここで有力政治家の利権が絡んでくる。政界のドン・井原は，自分が子どもを作れないことを知り，かといって他人の精子を利用することなどに我慢がならず，自分のクローンを作ることにする。そして，鞠子と双葉を生み出した研究チームに接近し，実際に自分のクローン，従って後継者たる男子を得る。しかし，このクローンの息子が死に，さらには自分も白血病に罹ったので，井原は骨髄移植のために再度自分のクローンを作ろうとする。ところが，前回のクローニングの際の医学的資料が無くなっていたため，生きた資料である鞠子と双葉の卵子を採取し，これを利用しようとして一連の事件が起きたというわけだったのだ。

図版２　フォレット：『第三双生児』

映画化もされたフォレットの『第三双生児』では，大学心理学科助教授のジニーがキャンパス内で発生したレイプ事件に絡んで，アメリカの保守派の陰謀を暴く姿が描かれる。ジニーは，遺伝と環境の両要因が犯罪の発生とどう関わるかと

の研究プロジェクトを進めていくうち，自分の披験者・スティーヴがレイプ事件の容疑者とされて逮捕されてしまう。このプロジェクトでジニーは，別々に育てられた一卵性双生児による犯罪を調査していたのだが，双子のスティーヴは無実なのにもかかわらず，かといって彼の対偶者は別の事件で服役中であり，完璧なアリバイがある。結局，無実を証明すると期待をかけていたDNA鑑定もスティーヴを犯人と指摘してしまう。では，第三の双生児が存在するのか。実は，これはジニーの属する心理学科の主任教授とアメリカ保守派の政治家たちがかつて極秘で進めた，ソビエトに対抗するクローニング計画の結果生まれたクローンたちだったのだ。つまり，それは優秀な兵士を作るためのプロジェクトであって，肉体的にも精神的にも優れたスーパー・ソルジャーを人工的に作ろうという計画だったのである。その実験過程で，8分割された受精卵を不妊治療のために病院を訪れた8人の女性に，無断で着床・妊娠させていたわけなのであった。主任教授側は様々な対抗手段に出て，この事実の発覚を妨害しようとするが，最終的にはジニーとスティーヴの協力で悪事が明るみに出，有力者たちは破滅する。

面白いのは，同じようなテーマを扱っているにもかかわらず，東野の作品は保守派政治家個人の利権のためにクローン技術が利用され，フォレットの場合は，レヴィンに似て，同じ保守派でも，彼らの考える理想のアメリカ人を作るための「優生」思想的発想の政治陰謀となっている点である。このあたりに昨今の日本における政治家像が透視されて，興味深い。

次に，「医療ホラー」とでも呼ぶべき作品がある。このジャンルには一般的には，たとえば病原菌ものや，細胞やミトコンドリアのような細胞の一部が人間を操るものなどがあるが，吉村達也の『ふたご』[9]は，そうしたいわば「遺伝子ホラー」に属する作品である。『ふたご』は，同時にミステリーの範疇に入るのであるが，安達真児なる人気スターが美貌の妻・ユキを殺すことから物語が始まる。ユキには一卵性の双生児で何から何までそっくりのパーフェクト・ツインというべきユリがいる。ふたりは完全同一体で，しかも頻繁に入れ替わって，常に互いの経験を共有している。その結果，ふたりの母親すら両者を区別できず，やがて彼女は発狂して死んでしまう。その位似ているスーパー・ツインなのだ。なぜならば，この二人は環境の影響を全く受けないからなのである。ところで，この作品には，最終的にはホモ・サピエンスにまで至る人類の進化の歴史は，「遺伝子」が自分の完全で美しい姿を見るためのものだったという前提がある。つまり，遺伝子が生命をヒトにまで進化させたのは，人類がヒト・ゲノム計画によってその「美しい」遺伝配列を解き明かすためというのだ。これによって，遺伝子は自分の「美しい」姿（遺伝配列）をみる鏡を手に入れたことになる。そして，その鏡を手に入れた遺伝子は，今度は進化を退行させ，生命の展開を収束させるために，完全同一体を作り出したというわけなのである。この作品の，遺伝子は美男子が好き，つまり，「遺伝子はミーハー」という「落ち」はそれはそれで面白い思いつきなのだが，環境の影響を全く受けない遺伝子という考えは，虚構としてであっても問題が多い。遺伝に対する誤解を与えるからである。

図版3　吉村達也：『ふたご』

さて，東野の『分身』においても，鞠子と双葉は自分とは何かということに随分悩むが，同一の遺伝子を持つクローンのアイデンティティを正面から扱った作品が出てきた。ドイツの

シャルロッテ・ケルナーの『ブループリント』[10]である。

音楽家のイーリス（Iris＝虹彩の意味）は，多発性硬化症により自分の将来がもう短いことを知る。それから間もなく，偶然彼女は人間におけるクローニング技術が開発されたとの記事を目にし，この技術を開発した学者に自分を実験台とするよう依頼する。そして，世界初の人間のクローン，すなわち自分自身のクローンを出産することに成功する。作品では，これをクローン暦元年と設定。これによって，彼女とその娘スーリイ（Siri：この名前はイーリスの綴りを逆にしたただけのもの）は，母であって娘，一卵性双生児の姉であって妹，そして自分であって自分Ｂでもあるといった関係となる。イーリスは死後も自分という存在がこの世に残り，自分の芸術を更に発展させてくれるためにクローンを作ったのだが，そのための入念な教育にもかかわらず，やがてスーリイは離反していく。一方，自分を主張したいスーリイであったとしても，何をしてもイーリスに似てくるばかり。彼女は，なかなか「わたし＝あなた＝わたしたち」という関係から抜け出せない（111）と悩むのである。ところで，一卵性のクローンとしての存在に全面的に安住してしまえば，そこにはそれなりに一体的な安心感があるにはある。しかし，そうした一体感は当然ながら偽のものであり，スーリイはそれを双子大会に出席したことで痛感する。「わたしはコピー，あなたはオリジナル。あなたが私を作らせた。あなただけが権力を握ってた。あなたなしでは，わたしは存在しなかった」（124）と。また他方で，皮肉なことに，イーリスにしても生きた鏡は耐え難いものになる。すなわち，「イーリス２号は慰めどころかどんどん拷問になっていく。若い自分の姿に嫉妬するのだ」（115）という具合に。

結局，イーリスの死まで，このふたりは「わたし＝あなた」の問題に苦しみ続けなくてはならない。イーリスの死後，スーリイはまず「双子は片割れの死を，クローンの子はクローンの母の死をどうやって受けとめたらいい？これからどうなるの？わたしも病気になるの？みんな遺伝で決まってるの？わたしはただの21ではなく，50歳でもあって，イーリスと同い年なの？」（191）と自ら問いかける。そして，時間の経過と共に，「やっとひとりで生きてもいい，という喜びから」，「泣くことができる」（197）ようになり，「死んだのはあなたであって，わたしではない」（198）との境地にたどり着けるのである。これが「わたし暦ゼロ年」である。ケルナーは，物語の最後に，スーリイが音楽家ではなく，「ダブルユー」というペンネームの美術家として独り立ちしていく10年後の物語を添付している。そして，ヒトに対するクローニングの技術が確立された「語りの現在」であるその時代においても，自分のクローンを産むことを希望する人が予想されたよりも少数であることも付け加えている（226）。

図４　ケルナー：『ブループリント』

最後に，これらをまとめていくつかの指摘をしておきたい。

まず，クローンの問題である。同一遺伝子を持っているペアはそれだけで一卵性双生児なのだろうか。本論で紹介した作品では，産んだ母親が違い，またその出産時期が違っていても，あるいは極端な場合，自分のクローンを出産したときでも「一卵性双生児」という表記が見られる。

次に，クローンに対する，そしてそこからその類似として出てくる一卵性多胎児に対する差

別的見方である。つまり，一卵性の双生児・多胎児が奇異な存在であると決め付けたり，あるいはただの遺伝子コピーに過ぎないといった偏見である。一人一人がかけがいのない個性として存在し，最近では特にその個性を伸ばそうと育てられるケースが多い一卵性双生児・多胎児なのに，こうした偏見においては，単なる複製品として蔑まれるのである。

また，クローンや分割受精卵を扱った作品に見られるのであるが，一般に，人々の意識の中に一卵性優位主義といったようなものがある。すなわちそれは，多胎児であるならばあくまでも一卵性で，瓜二つに似ていなくてはいけないとか，似ていない多胎児は面白くないというような風潮のことである。これはテレヴィ番組においても散見される傾向であるが，「なんだ二卵性か」といったコメントで傷つけられたりするようであったとしたら不幸なことと言わざるを得ない。

ところで，「バイオもの」には遺伝だけではなく，他の先端技術のトピックスが複合的に現れる。前述の東野圭吾が書いた『宿命』(11) という作品には，脳への電気刺激によって人間の意志や情動をコントロールする技術が出てくる。また，臓器移植，キメラ，サイボーグ，アポトーシスなどもこうした作品のテーマによく登ってくる。

しかし，一番問題と感じるのは遺伝宿命論というか遺伝決定主義である。ここ数年，「利己的な遺伝子」や遺伝子自身が意志や意識を持つようなイメジャリーが一般に広がっているように思われる。そして，これが優生思想的コンテキストと結びついたりして，たとえそれがあくまでもフィクションの世界の中であったとしても，決していい影響を与えないような気がする。色々な場面で，特に若い世代に正しい遺伝学の知識を伝える必要がある。

最後に，特に最近のバイオものに医療関係者に対する否定的な人物像が多いことを指摘して論を閉じたいと思う。極端に言えば，医師，看護従事者，医療機関職員，研究者などの医療関係者が，何をするか分からないような不気味な存在として描かれるのである。論者は，今までのツイン・スタディや育児支援のボランティアの経験から見て，多胎児と接している医療関係者は誠実だと日ごろ感じているが，医療関係者の市民に対する信頼が問われているようだ。一般的な医療不信が，「バイオもの」にも投影されているのである。

本論は，2001年1月27日に慶応大学を会場として開催された「日本双生児研究学会第15回学術講演会」において口頭発表した原稿を，加筆・修正したものである。

＜注＞

(1) ローレンス・B・ブロックマン：『コフィ博士と双子の片割れ』（垣内雪江訳）「ミステリーマガジン：特集医学ミステリの診断書」499（1997・10）。原作は，Lawrence G. Blochman: Dr. Coffee and the Other Twin.

(2) マーク・トウェイン：『まぬけのウィルソンとかの異形の双生児』（村川武彦訳）彩流社，1994年。原作は，“Pudd'nhead Willson and those Extraordinary Twins” 1894.

(3) エラリー・クイーン：『シャム双子の謎』（井上勇訳）創元推理文庫，1960年。原作は，“The Siamese Twin Mystery” 1933.

(4) 『朝日新聞』（東京本社）2001年1月29日第3面によれば，アメリカ・ケンタッキー大学のパノス・ザボス教授がイタリア人医師のセベリノ・アンティノリ氏等と協力して，不妊治療を目的に1，2年のうちにクローン人間を誕生させたいと発表したという。アメリカでは現在クローン人間を禁止する法律がなく，教授等は地中海のある国でこれを実施したいという。教授は，『ワシントン・ポスト』紙に対して，クローン人間が現

実になることは避けられず，従って，十分な技術を持った専門家の手によって公明正大に行われることが望ましいと語ったという。

(5) オルダス・ハックスリー：『すばらしい新世界』（松村達雄訳）講談社文庫，1974年。原作は，Aldous Huxley : "Brave New World" 1932.

(6) アイラ・レヴィン：『ブラジルから来た少年』（小倉多加志訳）早川書房，1982年；ハヤカワ文庫。原作は，Ira Levin : "The Boys from Brazil" 1976.

(7) 東野圭吾：『分身』集英社，1993年。初出は，『ドッペルゲンガー症候群』1992-93年，「小説すばる」。

(8) ケン・フォレット：『第三双生児』（佐々田雅子訳）新潮文庫，1997年。原作は，Ken Follet : "The Third Twin". NY 1996. 映画は，トム・マクローソン監督，ケリー・マクギリス，ジェイソン・ゲドリック主演，1997年アメリカ作品。

(9) 吉村達也：『ふたご』角川ホラー文庫，1996年。

(10) シャルロッテ・ケルナー：『ブループリント』（鈴木仁子訳）講談社，2000年。原作は，Charlotte Kerner : "Blueprint". Weinheim und Basel. 1999. 引用は，同訳書からで，ページ数のみ記す。

(11) 東野圭吾：『宿命』講談社文庫，1993年。